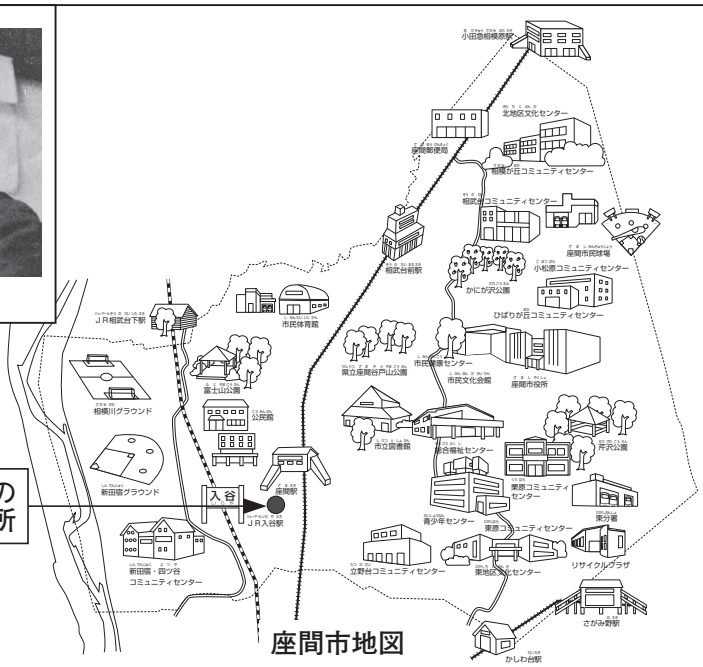
高松（たかまつ）　ミキ（みき）

座間村女子青年会を育てる

文　伊藤（いとう）　恵（めぐみ）

絵　大谷（おおたに）　之彦（ゆきひこ）
山上（やまがみ）　祐子（ゆうこ）

高松ミキ



座間市地図

西暦	和暦	年齢	できごと	時代背景
一八九九年	明治三二年	0歳	七月二四日、入谷五丁目に生まれる。	
一九〇六年	明治三九年	6歳	座間小学校の尋常科に入学する。	一九〇四年 日露戦争
一九一三年	大正　二年	16歳	座間小学校高等科を中退する。	一九一四年 第一次世界大戦
一九一九年	大正　八年	19歳	座間小学校の代用教員となる。	
一九二三年	大正十二年	22歳	座間村処女会の会長に就任する。	一九二三年 関東大震災
一九二七年	昭和　二年	23歳	女子青年会の功により、鈴木利貞と県知事表彰を受ける。	
一九二九年	昭和　四年	29歳	一月に母親が亡くなる。	
一九三二年	昭和　七年	32歳	座間小学校の代用教員を退職する。 座間村女子青年会長を辞任する。	
一九三三年	昭和　八年	33歳	上京する。	
一九三五年	昭和　十年	35歳	西巣鴨で書道塾を開く。	
一九四一年	昭和十六年	41歳	二月、病気のため亡くなる。	一九三九年 第二次世界大戦

【文・絵　作者紹介】

伊藤恵は、座間市の元教育委員で、今回の文章を執筆した。大谷之彦は、座間市教育研究所の教育史編集員で、座間の教育史について長年に渡り研究し、今回の文章の元となる研究所報原稿を執筆した。山上祐子は、市内中学校に勤務する美術科の教員で、挿絵を担当した。

昭和初期、座間の女子青年会は、文部大臣の表彰を受けるほど模範的で、その先進的な活動は全国から視察に来るほどでした。田舎だった座間で、どうしてそのような活動ができたのでしょうか。それは、高松ミキという女性の熱意と愛情から始まったのです。

座間小学校で育まれたミキ

高松ミキは、明治三十二年（１８９９年）七月二十四日に、高座郡座間村座間入谷（現在の皆原地区、入谷五丁目）に住んでいた高松住吉の長女として生まれました。生家は農家で、賢次という弟がいました。ミキは、明治三十九年（１９０６年）に尋常高等座間小学校（以下座間小学校という）の尋常科に入学しました。どのような子どもだったのでしょう。座間小学校の尋常科でミキを担当した鈴木利貞によれば、教科書以外にも、本を数えきれぬほど読み、しっかりとした意見を持った子どもだったようです。また、鈴

鈴木利貞
座間小学校の教員で、座間の幼年会を始めた人。
「郷土の先人に学ぶ」の第一話（５ページから）参照

木の長女で、後に女子青年会の副会長としてミキを助けた伊澤すみえによると、「ミキは、父の教え子の中でも、理想に一番かなった児童の一人であったと父が言っていた」そうです。

ミキは、鈴木利貞が始めた幼年会にも参加し、子どもたちが自ら成長していく過程を身をもって経験しました。そして、情熱を持って地域の教育に取り組んだ鈴木の生き方から多くを学びました。それだからこそ、小学校を卒業してからも、ミキは、何事も鈴木に相談し、一生の指導者として鈴木を仰いでいったのです。

小学校高等科を中退し、実業補習学校で学ぶ

ミキは成績が優秀だったため、義務教育の小学校尋常科六年間を修了した後、その上の高等科に進みました。高等科は二年制ですが、授業料が必要だったこともあり、当時は、特に女子では、高等科に行く人は多くはありません

仰ぐ
尊敬する、敬う

※学校制度については学校系統図（82ページ）を参照

でした。

ところが、一年後の大正二年（1913年）三月、十三歳のときに、ミキは高等科を中退することになりました。家の手伝いや弟の面倒を見るためというのが理由だったようです。そのときの心情を、ミキは、「學年末の思い」という文章に表しています。

學年末の思い

學年末となつて心せはしく、我等が最も愛すべき此の學校へ來る日數もわづかとなつた。此の頃になつて急に一日が貴い様に思はれる。近頃私は學校へ來ても少しも面白くない。といふのは、家の都合によつて、こひしき我が母校先生を始めとして、親しき友達と離れて、淋しく家に暮すのである。それで、もう此の學校で勉強する日も今日限り

かと思と、僅の一時間も貴く思はれる。

私は今日思つた。私はもう此の學校を退くのであるが、※あくまでも此の學校の爲に少くもなつて、立派な學校にしたいと山々思つて居る。私がこの座間小學校を離れると離れないとは私のこれからの心次第である。けれどもいつまでも此の心を変はらせずに此の學校の爲につくさうと思ふ。

あゝ、いつまでも此の學校を離れたくはない。

大正二年三月二十二日　高一　高松ミキ

ミキは、高等科を中退した後も、家を手伝いながら、実業補習学校の女子部へ通い、さらに研究科にも進みました。こうして、自分の置かれた境遇にも負けず、先生たちのもとで、意欲をもって学び続けるミキに新たな道が開かれたのです。

※（現代文）
あくまで、少なくてもこの学校のためになって、立派な学校にしたいと強く思っている。

実業補習学校
小学校を出て働いている青年のために設けられている学校。小学校の校舎を使い、教えるのは小学校の先生。三年制で、その上に研究科もある。農作業が少なくなる農閑期（一～三月）に開かれ、女子部では、修身、国語、算術、農業とともに女子のみの科目である裁縫、家政の授業も行われていた。授業料はなし。

小学校の代用教員になる

大正八年（１９１９年）、ミキが二十一歳のときです。ミキは、熱心に学ぶ姿勢が評価され、都筑郡（現在の横浜市）の尋常高等都田小学校（以下都田小学校という）の代用教員に採用されました。座間小学校ではなく都田小学校で採用されたのは、当時、座間出身の先生たちが都筑郡の小学校に勤務していて、彼らがミキを推薦したという背景があったようです。

その当時、小学校の教員になるためには、師範学校を卒業するか資格試験に合格する必要がありました。しかし、それだけでは教員の数が足りなかったので、旧制の中学校や高等女学校へ行った人などを中心に、読み書きや学問ができる地元の人を代用教員として採用する制度が定められていました。

ミキは、小学校高等科中退、すなわち小学校卒業の資格でしたが、高い学歴をもった人たちと同等な人物だと評価され、推薦されたのです。こうして、ミキは小学校教員としての人生をスタートさせました。

そして、三年後の大正十一年（１９２２年）三月に、ミキは母校である座間小学校へ転任しました。それは、栗原小学校が座間小学校に合併（がっぺい）され、栗原小学校の五・六年生が座間小学校に通学するようになって、多くの教員が必要になったためです。

当時のミキについて、『皆原の語部（かたりべ）』という冊子（さっし）に、「高松先生は近所でミキちゃんと呼ぶ人もあったが、テキパキしているので男みたいと小声で言う者もあった」と書かれています。よほど、しっかりしていたのでしょう。

座間村処女（しょじょ）会の会長に就任（しゅうにん）

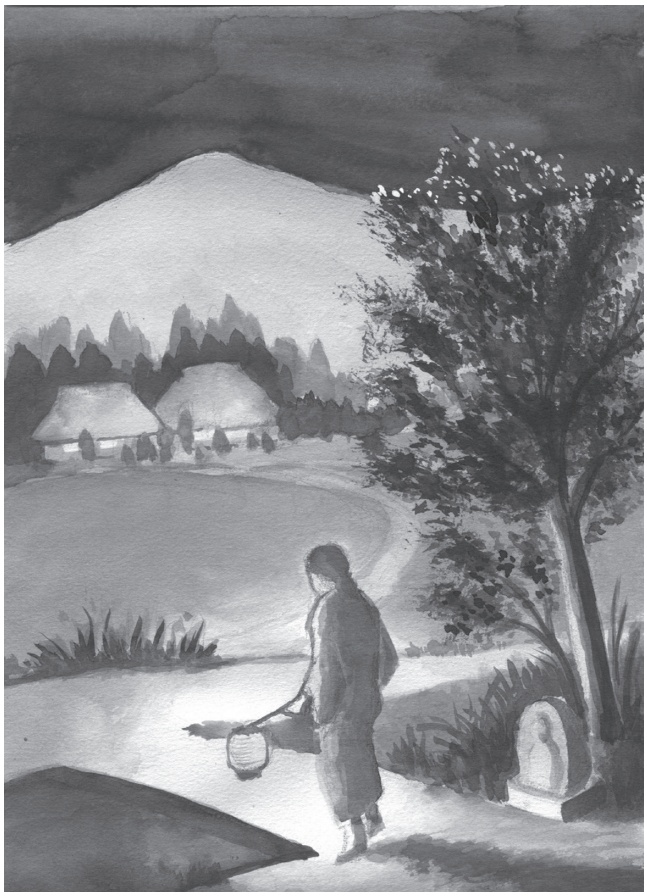
大正十二年（１９２３年）三月、ミキは、座間小学校の校長から座間村処女会（後の女子青年会）の会長になるように依頼（いらい）されました。処女会とは、まだ結婚（けっこん）していない若い女性たちの組織です。座間村処女会は、地域ごとに作られていた会がまとめられ、五年前に発足していました。ところが、会長

『皆原の語部』
皆原地区の明治、大正、昭和初期生まれの方々の思い出や体験を語った『物語集』。平成九年発行。

として処女会に出席したミキは、大いに失望しました。会員の女性たちは、ただ、着飾り、お茶を飲み、お菓子を食べ、雑談するだけでした。

処女会の目的は、お互いに学びあい、人格を磨き、将来家庭を運営する知識を身につけ、さらに地域の改善を行うことでした。しかし、きちんとした事業計画もなく、会員たちは本来の目的を理解しているようには見えませんでした。女は結婚すればいいので、おとなしくして、自分の意見などは持たなくてもよい、何事もでしゃばらないという当時のならわしが影響していたと思われます。そのため、恥ずかしがる年頃ということもあったでしょうが、話すときも下を向いてぼそぼそしゃべって、何を言っているのかわかりませんでした。

女子青年会の役員たち（前列中央がミキ）



このままでは、処女会は駄目になると感じたミキは、本来の目的が果たせるように働く決意をします。ミキは、まず、十五の地区で役員を二人ずつ選びだし、リーダーとして育成していきます。この方法は、ミキが小学校のときに鈴木利貞に指導してもらった幼年会の組長制度と同じでした。

ミキは、月二回の役員会議で、会の発展は役員一人一人の自覚にかかっていると語りかけました。役員たちはミキの熱い思いに共鳴し、自らも働き出しました。次に、ミキは、毎晩のように各集落をまわり、一軒一軒、家庭を

組長制度
「郷土先人に学ぶ」第一話（21ページ）参照

訪問して、「大切な娘さんなればこそ、立派な女性に育て上げるために、定期的に会に出席させて欲しい。そのために、家の仕事をおろそかにするようなことは決してさせません。」

と説得したのです。これらの活動は、教員の仕事を終えてから行ったため、夜遅くなることもありました。また、学校の父兄会や母子会でも、会の活動への理解を訴えました。やがて、ミキの熱心な態度に親たちも心を動かされていきました。

なお、翌年の大正十三年（１９２４年）に、処女会は座間村女子青年会と名称を改めています。

飛躍する座間村女子青年会の活動

ミキは役員たちの協力を得て、多くの活動を計画し、行っていきました。まず、会が活動するのに必要なお金を作るため、会員各自が毎月十銭を郵便局に貯金しました。また、仕事着の仕立てや弁当作り、蛾育という養蚕などを共同して行い、そこから得たお金を積み立てました。弁当作りは家庭料理の参考にもなり、栄養指導にもなりました。大山登山、かるた会、針供養、月見の会、雛祭、食材をもちよって料理を研究する「一品会」などの、会員が楽しく参加できる催しも多く行われました。教養を身につけるために、講演会、談話会、研究発表会、読書会などを開き、工場や新聞社の見学会も実施しました。これらの活

蛾育の風景

十銭
百銭＝一円。現在のお金の価値にすると、二百円くらい。昭和元年当時、米十キロで三円二十銭（現在は四千円程度）、また山手線初乗りは五銭（現在は百三十三円）。

蛾育
村内の蚕種家に蚕の卵がついた蚕種紙を寄付してもらい、その蚕種紙を各会員に三枚ずつ配布し、養蚕の研究を兼ねて蚕を飼育し繭を収穫した。収穫した繭の一部を積み立て資金とした。

針供養
裁縫によって折れたり曲がったりした針を、近くの神社に納め、供養する行事。

動は、会員の出席率を高めるのに役立ちました。

さらに、会誌『あを雲』を自分たちで発行しました。時事問題についての討論、家事の実用記事、自分たちの思いや夢を表現した詩や歌というように盛りだくさんの内容でした。後に会を取材した婦人雑誌の記者は、会誌の内容の豊かさだけでなく、特に会誌を女性たちだけで立派に刊行していることを称賛しています。他に、地域とのきずなを深める敬老会の開催、戦死した人々を祀った忠魂碑のお参り、神社から村へつながる道路の掃除などを行いました。

会誌『あを雲』

このように、自主的に活動する、皆で協力する、自分たちで会の資金を生み出す、修養にはげむ、会員の親睦を深める、地域のために役に立とうとする、

『あを雲』
写真は昭和四年（１９２９年）十二月発行の第三号。この中に掲げられているこの年の行事予定は、
イ　講習会、
ロ　講演会、
ハ　見学旅行、
ニ　蛾育（養蚕）、
ホ　会旗調整、
ヘ　運動会、
ト　読書奨励、
チ　娯楽会、
リ　総集会、
ヌ　パンフレット刊行
また、内容を読んでいくと、国や県の方針に則って活動を進めていたことが分かる。

自分たちで会誌を発行する、といった方針は、幼年会の活動と共通しています。

会員の心を一つにする活動

会の運営を活発にするためには、解決するべき問題もありました。それは、会員の服装が華美になって、経済的に苦しい家庭の者は会に出にくくなっていたということでした。

そこで、まず、ミキは会合には質素な木綿の着物を着てくることを奨励しました。さらに、「会員が同じ服を身につけて、お互いに励まし合いましょう」という会員の提案から、女子青年会の会服を安い費用で作ろうとしました。そして、昭和三年（１９２８年）、ついに「座女」と小さく染め出した木綿の着物の会服を作ることができました。総会で皆が揃って着たときには、ミキは喜びに涙を流したそうです。地味な会服でしたが、これこそが座間の女子青年会の姿だと、会員は誇りに思ったのでした。

共同作業などで積み立てた資金で、昭和七年（１９３２年）には、会のシンボルである会旗も作成しました。また、会員が結婚する時は、会のマークが入った風呂敷を結婚祝いとして贈りました。「悲しみも、苦しみもどうぞこの風呂敷にしっかり包んで辛抱してください」という意味がこめられていたのです。そして、結婚して出ていく会員を、皆で村の境まで見送りました。会員が病気になればお見舞いをし、亡くなれば葬式に参列しました。これらの活動によって、会員の心は一つになり、お互いが姉妹以上の親しさを持ちました。そして、会員たちは積極的に行動するように変わっていきました。

全国に名を知られるミキと座間村女子青年会

座間村女子青年会は、こうして会員間のきずなを強めながら、順調に活動を発展させ、約二六〇名の会員をもつようになっていきました。そして、優れた活動を行うことで、県や国からも注目されるようになりました。

昭和二年（１９２７年）七月に、ミキは女子青年会の活動の発展に貢献（こうけん）したために、県知事から表彰されました。なお、恩師である鈴木利貞もこの時に一緒（いっしょ）に表彰されました。そして、ミキは高座郡の連合女子青年会の会長に就任し、後には県連合女子青年会の理事にもつきました。座間村女子青年会も模範女子青年会として県知事から表彰され、県下にその名が知られて

会服を着て勢揃いした座間女子青年会員（前列に写っているのが会旗。）

県知事表彰
「郷土の先人に学ぶ」第一話（24ページ）参照。

いきました。さらに昭和五年（１９３０年）には、女子青年会は文部大臣からも「全国模範女子青年会」として表彰されました。

座間村女子青年会の名声が高まるにつれて、県外からも視察団が訪れるようになり、やがて遠い満州国からも来ました。会員たちは皆で、手作りのお菓子や食事で、視察に来た方々をもてなしました。

会長を辞任したミキ

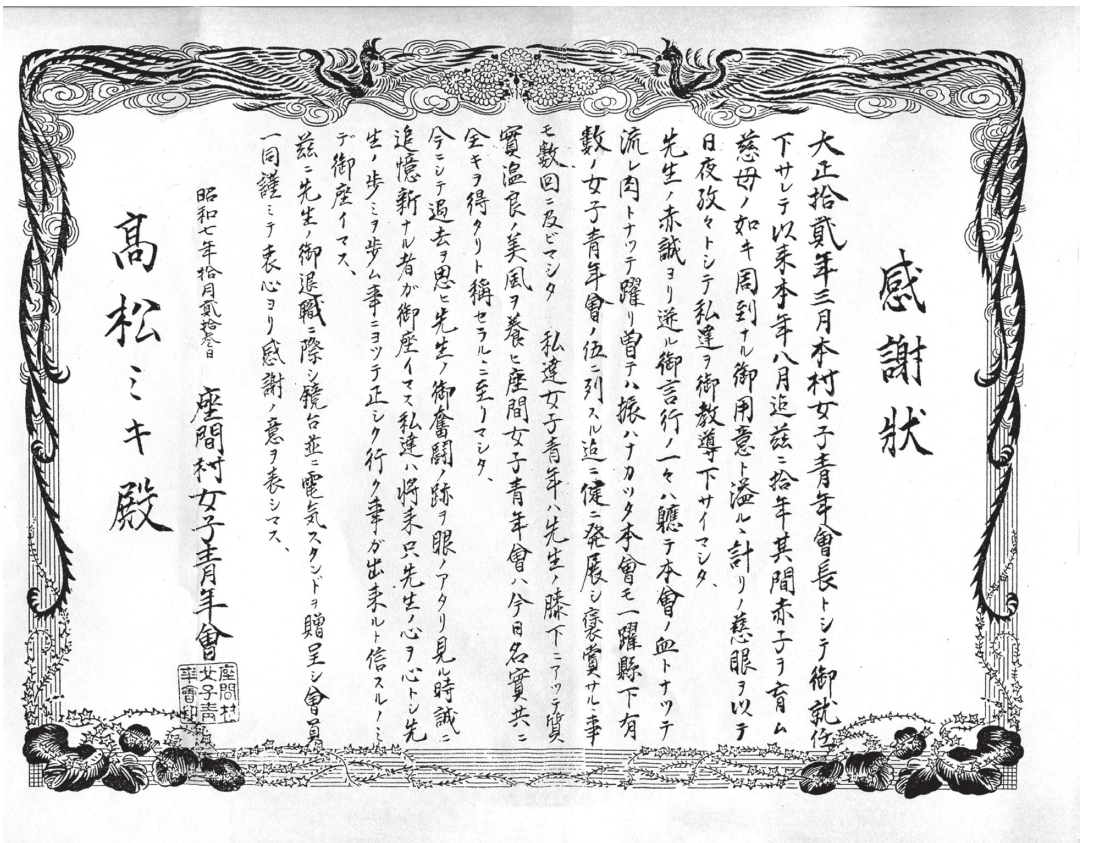
女子青年会が発展する一方で、ミキに悲しいことが起きました。ミキの母親が昭和四年（１９２９年）一月に亡くなったのです。母親の突然（とつぜん）の死は、ミキにとって、自分を支えていた糸が突然切れたようなできごとでした。ミキの心の痛手（いたで）は大きく、女子青年会の会長を辞めようとしました。しかし、会員から「辞任しないでください」と熱心にひきとめられたため、とどまりました。

満州国
日本が満州事変によって占領した中国東北部につくりあげた国家。１９３２年から１９４５年まで存在した。

三年後の昭和七年（１９３２年）三月に、ミキは座間小学校の教師を退職しました。ミキは代用教員だったので、資格試験を受けて教員免許状を得ることが期待されましたが、女子青年会を指導しながら資格試験の勉強をすることは難しかったようです。

そして、女子青年会の会長の職も、後任が決まったため、同じ年の八月には辞めることになりました。しかし、ミキの胸のなかには、会長としてやるべきことはすべてやり終えたという、満足感があったのではないでしょうか。

女子青年会からは、感謝状と記念品が贈られました。そこには、いつも母親のように細かいところまで心を配って指導した、ミキへの感謝の言葉が捧げられています。



感謝狀

大正拾貳年三月本村女子青年會長トシテ御就任
下サレテ以來本年八月迄茲ニ拾年其間赤子ヲ育ム
慈母ノ如キ周到ナル御用意ト溢ル、計リノ慈眼ヲ以テ
日夜孜々トシテ私達ヲ御教導下サイマシタ、
先生ノ赤誠ヨリ迸ル御言行ノ一々ハ聽テ本會ノ血トナツテ
流レ肉トナツテ躍リ曾テハ振ハナカツタ本會モ一躍縣下有
數ノ女子青年會ノ伍ニ列スル迄ニ健ニ發展シ褒賞サル事
モ數回ニ及ビマシタ　私達女子青年ハ先生ノ膝下ニアツテ質
實溫良ノ美風ヲ養ヒ座間女子青年會ハ今日名實共ニ
全キヲ得タリト稱セラルニ至リマシタ、
今ニシテ過去ヲ思ヒ先生ノ御奮闘ノ跡ヲ眼ノアタリ見ル時誠ニ
追憶新ナル者カ御座イマス私達ハ將來只先生ノ心ヲ心トシ先
生ノ歩ミヲ歩ム事ニヨツテ正シク行ク幸ヲ出來ルト信スルノミ
デ御座イマス、
茲ニ先生ノ御退職ニ際シ鏡台並ニ電氣スタンドヲ贈呈シ會員
一同謹ミテ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表シマス、

昭和七年拾月貳拾參日　座間村女子青年會

高松ミキ殿

（現代文）
大正十二年三月座間村女子青年会の会長になって以来今年の八月までの十年間、赤ちゃんを育てる母親のように行き届いた世話と優しいまなざしで、昼も夜も熱心に私たちを指導してくださいました。先生のうそ偽りのない言動の一つ一つはやがて会の血となり肉となり、会も一躍県内有数の女子青年会に並ぶまでに発展し、ほめられることも数回に及びました。私たち女子青年は、先生のもとで、真面目で穏やかな良い気風を養いました。そして、座間女子青年会は今日名実ともに素晴らしい団体となったと言われるまでになりました。
今振り返ると先生の奮闘の後を見て、新たに思うことがあります。わたしたちはこれからも先生の心を心とし、先生の歩みを歩みとすることで、正しく進むことができると信じています。
先生のご退職にあたり、鏡台と電気スタンドを贈り、会員一同謹んで心より感謝の気持ちを表します。
昭和七年十月十三日
座間村女子青年会
高松　ミキ　殿

東京西巣鴨で書道塾を開くミキ

教師を辞めたミキは、第二の人生を歩み始めました。昭和八年（１９３３年）に、東京に転居したのです。そして、飯島春敬という有名な書道家に師事しました。わずか二年後には、「敬秀」という号を名乗ることが許され、西巣鴨に自らの書道塾「愛日書院」を開きました。ミキは、師についた二年間、持ち前の熱心さで猛烈に修業に励んだのでしょう。

ミキは、書道塾の先生としてだけではなく、人生の師として子どもたちや保護者から慕われ、教えを請われました。昭和十六年（１９４１年）一月には隣組の組織にならって、地域の子どもたちの組織である、子供隣組「若菜会」を結成します。ここにも幼年会の影響が見て取れます。

しかし、残念なことに、同年二月、四十一歳で、病気のために亡くなりました。

西巣鴨
東京都豊島区にある地域。

飯島春敬
明治三十九年生まれの書道家。昭和二十年、日本書道美術院を創設し、戦後の書道界の再建と書道普及につとめた。
当時、「春敬」の「敬」の字が入った号を名乗ることは、春敬がミキを高く評価していたことが伺える。

隣組
当時の戦時体制の中で制度化された互助組織。町内の数軒のご近所が集まってできた「班」に等しい。

今に受け継がれるミキの心

※座間村女子青年会はミキを追悼する冊子を出しています。そこには、多くの人々が文章を寄せ、ミキの死を悼み、その人柄や行いを讃えました。女子青年会の会員は、「誠実で純粋な性格であった、信じる道を真っすぐに進み、常に教育者として活動を行った」と書きました。書道塾の教え子に関しては、「どんな習字嫌いの子どもでも、一度お稽古を受けると、次のお稽古を待ち兼ねるようになる」、また「習字が好きになると同時に、この先生が好きで好きでたまらなくなる」と書かれています。教育者という職業は、ミキの天職だったことが伝わってきます。そして、友人からは、お茶目な一面や歌舞伎、長唄、文楽が好きだったこと、おいしい物に目がなかったことなども明かされています。

ミキは、雑誌などで「熱と愛の女史」とあだ名されるほどの情熱と愛情を持って活動に打ち込み、座間の女子青年の意識を高め、女子青年が自ら向上する

※昭和十六年より女子青年会は、女子青年団に変わっている。

追悼
死者の生前をしのび、その死をいたみ、悲しむこと。

歌舞伎
出雲の阿国歌舞伎に始まり、江戸時代に発達・完成した。わが国特有の民族演劇。

長唄
三味線歌曲。

文楽
操人形浄瑠璃の芝居。

ように導きました。

ミキのまっすぐな心は、鈴木利貞をはじめとする座間の教育者たちによって豊かに育まれ、地域の教育に貢献する活動のみなもととなりました。ミキの豊かな心は、座間の小学校の児童や中学校の生徒たちに受け継がれていくことでしょう。

【参考・引用文献】

大谷之彦（2012～2013）「座間村女子青年会を育てた高松ミキ女史の軌跡（その1～4）」『研究所報』第85、86、88、89号　座間市教育委員会

同（2012）「座間村女子青年会を育てた高松ミキ女史の軌跡」第3回教育教養研修講座（公開講座）配布資料　座間市教育委員会

大日本連合女子青年団（1932 5.10）『女子青年』第六十号

婦人記者（1932）「熱と愛の力で作られた座間村女子青年會の訪問記」『主婦之友』11月号　主婦の友社

座間小学校創立百周年事業実行委員会（1995）『座間小学校創立百周年記念誌1886～1995』

発行者・発行年不詳『高松ミキ先生追悼録』

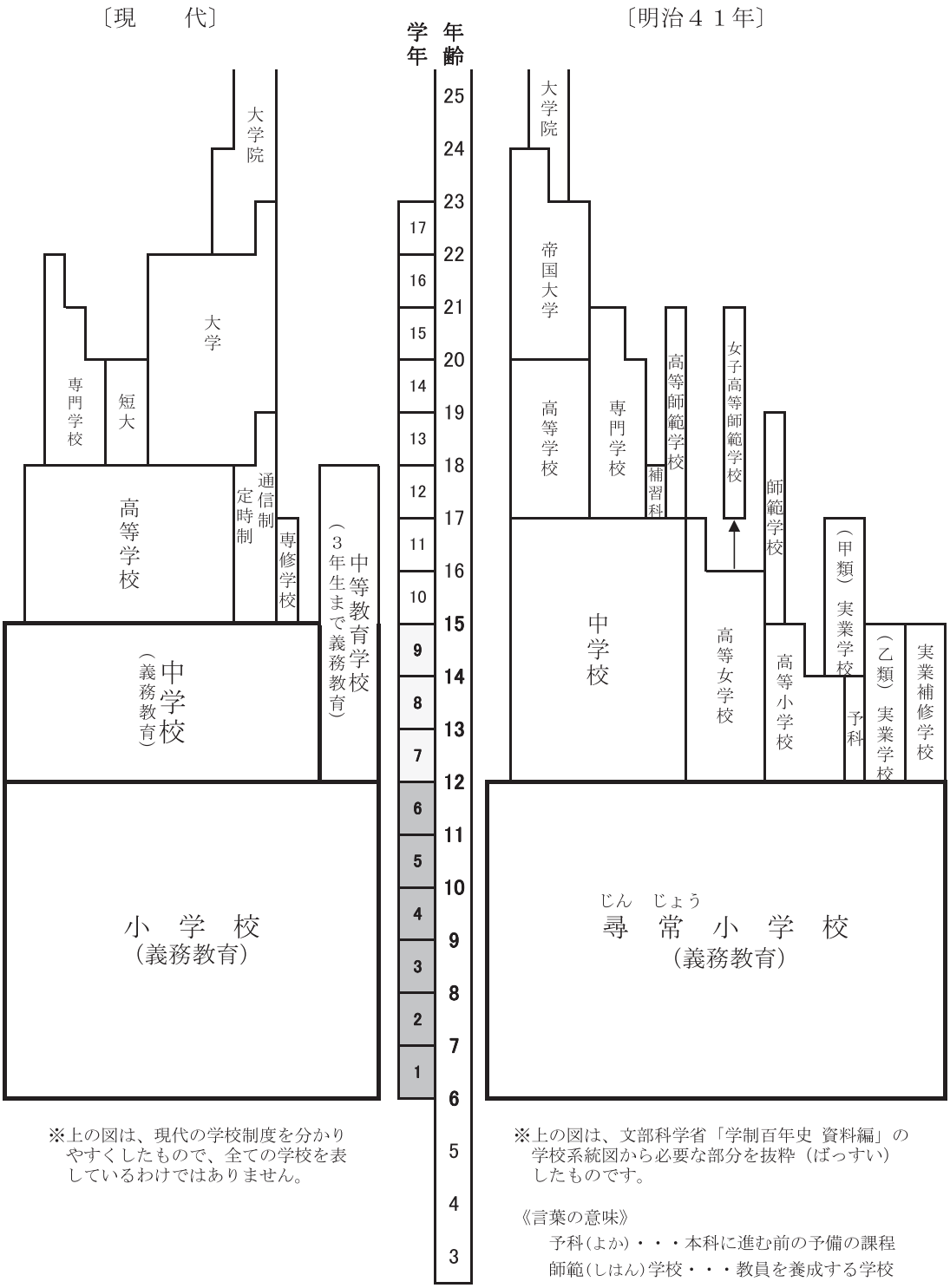
江刺昭子＋史の会（2005）『時代を拓いた女たち　かながわの131人』神奈川新聞社

神奈川県立婦人総合センターかながわ女性史編集委員会（1987）『かながわ近代の女たち　夜明けの航跡』ドメス出版

座間市教育研究所（2014）『座間市教育史　第一巻　近代資料編』座間市教育委員会

長田かな子（1998）『ひたむきの年輪』相模経済新聞社

【学校系統図】（けいとうず）



※上の図は、現代の学校制度を分かりやすくしたもので、全ての学校を表しているわけではありません。

※上の図は、文部科学省「学制百年史 資料編」の学校系統図から必要な部分を抜粋（ばっすい）したものです。

《言葉の意味》

予科（よか）・・・本科に進む前の予備の課程

師範（しはん）学校・・・教員を養成する学校